

# 英学史の研究

竹中龍範

## (1) 学会・学界の動向

昨年 2018 年が明治改元から 150 年目に当たることで、明治 150 年と銘打ち、いくつかの催しが行われた。しかし、これは周年と紀年との混同によるもので、明治元年の 1868 年から数えれば一昨 2017 年が明治 150 年となるはずである。現代を明治時代の延長線上に置くことの当否は別にして、幕末・明治時代はまさに「英学」の時代、わが国の文明開化を推し進めるうえで英学の果たした役割は大きかった。この英学の歴史を対象とする英学史研究が盛んに行われた時期がこれまでいくつか見られるが、現時、英学史研究は盛り上がりを見せているのであろうか。この答は今より数十年後の評価によって得られようが、その評価につながる基礎作業として、当年度(2017 年 4 月～2018 年 3 月)も英学史の研究に係る学会・学界の動きから見ておく。

まず、5 月、日本英語教育史学会が第 33 回全国大会(福島大会)を 20 日(土)・21 日(日)の両日、福島県郡山市の日本大学工学部を会場に開催した。初日は、鳥飼玖美子による記念講演「英語教育論争から考える」が行われ、続いて坪田清『新学習指導要領』の策定プロセスを検証するなど研究発表 3 本を聴いた。2 日目は馬本勉「ネスフィールド独習書に関する研究」など 10 本の研究発表が行われた。この全国大会に続く隔月開催の研究例会は第 263 回～第 267 回と 5 回にわたって開催され、田中正道「第五高等学校入学試験英語問題の解析」など 10 本の研究発表を聴いている。

日本英学史学会は、第 54 回全国大会を 10 月 21 日(土)～22 日(日)、杏林大学井の頭キャンパスにて開催した。初日は、飛田良文の特別講演「日本語に影響を及ぼした蘭学・英学」を聴き、2 日目は、川瀬健一「越前府中とアーネスト・サトウ」など 12 本の研究発表が行われた。本部月例研究会は、第 510 回例会(3 月に繰り上げ)から 8、10 月を除いて 2018 年 3 月の第 519 回まで開催、三好彰「ビッドル提督英文再考」など研究発表 8 本と小林信行「自著『島田謹二伝』を語る」が行われた。第 519 回例会は日本仏学史学会との合同開催とし、楠家重敏の講演を聴いた。

同学会各支部の活動では、東日本支部が 2018 年 3 月 30 日(金)に東京都文京シビック・センターを会場に第 22 回支部大会を開催し、茂住實男「横浜育ちの天心少年と正則英語」ほか 4 本の研究発表と井上能孝による特別講演「開港場箱館の諸術調所とは——武田斐三郎なればこそ」を聴いた。関西支部は、第 53 回支部大会を 6 月 3 日(土)、第 26 回研究大会を 8 月 26 日(土)に、それぞれ桃山学院大学、同志社大学にて開催し

## 英学史の研究

た。支部大会では加藤詔士「帰国後のお雇い教師 H. ダイアー——技術教育の改革」ほか1本、研究大会では三好彰「新たに見つけ出した新島襄のラットランド演説を伝える現地新聞記事」ほか1本の発表が行われた。中国・四国支部は、当年度第1回研究例会を5月27日(土)にサテライトキャンパスひろしまにて開催し、馬本勉「日本における英語基本語の史的検討(1): 令文社『学習英語辞典』を手がかりに」など2本の研究発表が行われた。第2回研究例会は、12月9日(土)、香川大学を会場に、田村道美「日本における *Pride and Prejudice* の受容——漱石、豊一郎、弥生子を中心に」と竹中龍範「英学史・英語教育史研究に魅せられて」の講演2本という特別プログラムを組んだ。九州支部は、6月24日(土)、ホテルニュープラザ久留米を会場に支部大会を開催、西川盛雄「ラフカディオ・ハーンと浮田和民」など5本の研究発表、原武哲「夏目漱石と菅虎雄」ほかの提案・講演を聴いた。また、この時の総会決議を受け、『日本英学史学会九州支部発足40周年記念論文集録』第2号「旧制第五高等(中)学校お雇い外国人英語教師の調査・研究——夏目金之助(漱石)教授とラフカディオ・ハーン(八雲)の業績再評価の試み」を2018年1月付けにて刊行した。池邊和彦「ジョン・ビー・ブランドラムの軌跡」など既発表の論文12本と、福澤清「漱石とハーンと」等4本の特別寄稿、及び参考資料から成る。

学会賞について、日本英学史学会では、豊田實賞が吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R・H・プライス (Reginald Horace Blyth) 研究——足跡と業績』(2016年10月)に、奨励賞が森悟『武信由太郎伝』(2016年7月)に、それぞれ授与された。他方、日本英語教育史学会賞は該当者なしの状況が続いている。

なお、第56回シェイクスピア学会(10月7日(土)・8日(日)、近畿大学)では、セミナー「英学史に於けるシェイクスピア(沙翁)」が催された。コーディネーターに村上健、メンバーに内丸公平、森祐希子ら6名を配し、ゲスト・スピーカーに川戸道昭を迎えて、「翻案・翻訳・上演を主とした従来の『シェイクスピア受容史』から、他の関連領域(新聞雑誌史・英語教育史・娯楽芸能史・研究史など)も含む『英学史=広義の外国文化受容史』へと研究の射程を広げること」、及び、「書誌学的方法論を徹底させて、第一次資料(+それに準ずる資料)を出来るだけ体系的に明示すること」の2点に留意して、明治・大正・昭和前期辺りまでを中心に議論がなされた。

また、NHK ラジオ第2放送で、齋藤兆史「見つめ合う英文学と日本——カーライル、ディケンズからイシグロまで」が2018年1~3月の毎日曜朝に放送された。前半は「明治初期に西洋の文物が大量に流入して以来日本人が愛読してきた作家と作品」に、後半は「愛情や批判を込めて日本を描いた作家と作品」に焦点を当てて、「それぞれの作家や作品から日本人は何を学んだのか、あるいは学ぶべきなのか」「(「はじめに」)を講じた。同題のテキストが発行されている(NHK出版、2018年1月)。

当年度の物故者として、広島ラフカディオ・ハーンの会を牽引した風呂呂章が2018年

## 回顧と展望

2月に逝去した。本稿にて紹介してきた八雲会の『へるん』誌は同氏から恵贈に与っていたもの、記して謝意を表するとともに冥福をお祈りする。

### (2) 単行本

前年度遺漏分として竹内力雄『熊本洋学校三級生 坂上竹松——貴重遺品と洋学校教育』（私家版、2016年4月）を挙げる。熊本洋学校に第3期入学生として入った坂上の修学時資料が同家より熊本県立第一高校に寄贈され（1963年）、さらに熊本市のジェーンズ邸に転贈されて（2000年）いるが、この資料群の内容を紹介しつつ、坂上の事歴を明らかにした論考である。

当年度に刊行の著作のうち、まず、歿後100年、生誕150年に続き今なお人気のある夏目漱石に係るところを取り上げる。

中で庄巻と言うべきは、小森陽一ほか編『漱石辞典』（翰林書房、2017年5月）である。「漱石が現実用に用いた言葉であり、漱石が確かに実見し、手に取り、触れたことのある書物や芸術作品」（「はじめに」）のみを取り上げて立項し、800に及ぶ中項目・小項目を「人」「時代」「作品」「文学用語」等11の大項目の下に編んでいる。これにコラム29本を配し、巻末には付録として漱石の年譜や作品の書誌情報等を収める。

英語教師としての漱石に焦点をあてたものでは、年度早々の2017年4月、大井田義彰編『教師失格 夏目漱石教育論集』（東京学芸大学出版会）が刊行された。「これまでさほど日の目を見ることが多くはなかった教育関連の文章や講演・談話など十編と若干の関連文章を集めた文集」で、「専門の英語教育論を中心に、教育に関するさまざまな意見や提言」（「はじめに 教育者としての漱石」）を集成している。西川盛雄『夏目漱石考——熊本時代を中心に』（新宿書房、2017年12月）もその第II部において、漱石が第五高等（中）学校に教鞭をとった時代を取り上げ、その試験問題を分析し、「中学改良策」・「語学養成法」・「中学授業参観報告書」の意味を論じ、さらに、文学評論3本、及び英詩に説き及ぶ。

小鹿原敏夫『漱石に英文学を読む』（晃洋書房、2017年11月）は、著者が、「四十歳を過ぎてから、漱石を彼が読んだ英文学作品と一緒に読むことの面白さを発見し」、「英文学を通じて漱石を読み解こうとした」（「まえがき」）もので、国文学畑からの漱石英文学論である。飛ヶ谷美穂子『漱石の書齋——外国文学へのまなざし 共鳴する孤独』（慶應義塾大学出版会、2017年12月）は、前著『漱石の源泉——創造への階梯』（2002）と同様に、「漱石作品と外国文学の本文比較にもとづく源泉研究と、その前提となる漱石旧蔵書や自筆資料の調査分析を土台に、そこから作品の新たな読みを探ろうと」（「はじめに」）した比較文学の視点による論考である。三上命『「夏目狂セリ」——ロンドンで何が起きたのか』（満天地、2017年11月）は、ロンドン留学中の漱石に起きた悩乱を、その劣等感や「勝とう勝とうの心」、妄想、自意識過剰から生じたものであり、そ

## 英学史の研究

れが後の作品、殊に『坩夫』及び『夢十夜』の第二夜に映されているとして、そこに見られる描写を漱石自身の言動と結び合わせて分析している。

外山滋比古『日本の英語、英文学』（研究社、2017年11月）は、「苦しんでいる英語教師の心中を思うと、じっとしていられない思いがある。／何としても、英語、英文学の伝統を消したくないが、できることは限られている。個人としてできることは、これまでの百年に、英語、英文学がなしたことをふり返ってみることであると考えようになって、この本を書くことにした」（「〈あとがきにかえて〉新生へ向けての回想」）ものである。自身の英学史をも織り交ぜて日本の英学史を回想する。

堀孝彦『続「戦後」倫理ノート 2004—2017』（未知谷、2017年6月）は、書名が倫理学書を思わせるが、2部構成の第1部は日本英学史に係るもので、紙数にして総ページ数の半分を占める。「通詞・堀達之助と箱（函）館」など、堀達之助関係のものを主として、既発表、未発表の論考・随想18本をまとめたものである。

横浜プロテスタント史研究会編『横浜の女性宣教師たち——開港から戦後復興の足跡』（有隣堂、2018年3月）は、幕末・明治初期に來日した女性宣教師に始まり、当時、女性宣教師には牧師になる道が閉ざされていたためにミッション・スクールでの教授や社会文化活動に携わったクララ・リート・ヘボンやメアリー・E・（キダー）ミラーなど50名近くを挙げて、その事績を明らかにしている。

沖縄の英学史では、緒方修『青い眼の琉球往来——ペリー以前とペリー以後』（芙蓉書房出版、2017年10月）が「琉球を訪れた異邦人たちの報告を読み、彼らの感じた琉球の印象と送り出した先の意図を探る」（「序章」）ことを試みている。

1917年の創立から100年を迎えた日米協会について、飯森明子『戦争を乗り越えた日米交流——日米協会の役割と日米関係 1917～1960』（彩流社、2017年7月）が、その創立から1960年までを対象とし、「まずは日米関係を民と官を合わせた視点から歴史的に考え」、そして、「太平洋戦争を挟んだ協会の活動から、その活動の意義と、国際交流の連続性、継続性の意義を引き出すこと」（「はじめに」）をねらいとして、同協会の活動の跡を明らかにしている。

千森幹子『ガリヴァーとオリエント——日英図像と作品にみる東方幻想』（法政大学出版局、2018年3月）は、『『ガリヴァー旅行記』作品とその英仏版図像にみるオリエント表象、特に日本表象を論じるのはじめての研究であり、明治から昭和初期にいたる『ガリヴァー旅行記』邦訳と図像研究にかかわる、本格的な受容研究で』（「プロローグ」）あり、その第2部は『『ガリヴァー旅行記』邦訳と日英図像』と題され、英学史研究の領域からも関心を惹かれる比較学際的研究である。

柿木重宜『日本における近代「言語学」成立事情Ⅰ——藤岡勝二の言語思想を中心として』（ナカニシヤ出版、2017年12月）は、『『博言学』から脱し、『言語学』という萌芽期の学問が、どのような言語思想を基にして形づくられたのか、その経緯を、藤

## 回顧と展望

岡勝二という一人の言語学者を軸にして、解明していくことを目的」とし、「当時の文献資料を詳細に検討しながら、近代言語学史の観点から考察」（「はじめに」）する。

比較文学の方面では、「比較文学の父」と呼ばれた島田謹二の評伝『島田謹二伝——日本人文学の「横綱」』（ミネルヴァ書房、2017年7月）が小林信行により著された。島田を師と仰ぐ著者が、「夜々として学びつづけ、新しい学問を創り出し、その学問を発展させ、多くの俊秀たちを育成しながら独自の研究分野を開拓して多くの業績を重ねていく経緯を辿れるものなら、『人と業績』としてまとめることは出来ないかと」（「はじめに」）考えてまとめ上げた大著である。

日本学、及び東洋学の方面では、楠谷重敏『〈年譜〉駐日イギリス外交官の日本語学習・日本研究（1853～1878）』（杏林大学外国語学部紀要別冊第1号、2017年4月）が、「駐日イギリス公使館や領事館に属するイギリス外交官の日本語学習と日本研究の進展を年譜に」（「はしがき」）し、1853年から1878年に至る間の状況を詳細にまとめる。また、同氏『ジャパノロジーことはじめ——日本アジア協会の研究』（晃洋書房、2017年10月）は、1872（明治5）年に横浜居留地で創設され、日本最初の学術研究団体とされる日本アジア協会について、「一四五年前の在日西欧人が発表した論文や議事録などを丹念に読み解いて、忘れ去られたジャパノロジスト（外国人日本研究家）たちの姿をよみがえらそう」（「はじめに」）として、同協会紀要を読み解きながらその事績を跡付けている。一方、わが国における東洋学・中国研究の一大拠点である東洋文庫では、当年2017年が同文庫蔵書の礎石となった「モリソン文庫」の渡来100周年となることを記念して、「東洋文庫の成り立ち、発展、そして現在のあゆみを『モリソン文庫』、そしてモリソン博士自身との関わりから考えてみることにし」（「まえがき」）、岡本隆司編『G・E・モリソンと近代東アジア——東洋学の形成と東洋文庫の蔵書』（勉誠出版、2017年9月）を編集出版した。また、海外における日本研究の分野では、「海外の図書館で所蔵されている日本語コレクションは、日本研究のために構築されて来た」ためにそこに「日本研究の豊かな歴史が秘められていると考えられる」（「序章」）とする小山騰『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み——国学から日本学へ』（勉誠出版、2017年9月）が、「比較的規模が大きく、かつそれなりに長い歴史を持つ」“研究図書館”（同）としてケンブリッジ大学図書館の日本語コレクションを対象に、日本学・日本研究の歩みをたどり、その意義を論じている。

なお、研究書ではないが、本邦英語教育史上に重要な文献でありながら、国立国会図書館デジタルコレクションに未収録・非公開のものの中から、明治期の「小学校用文部省英語読本」全3巻、同「巻一教授書」やマーセル著・吉田直太郎訳『外国語研究法』など18点を選書し、監修者江利川春雄による解説を附した「英語教育史重要文献集成 第1期」全5巻（ゆまに書房、2017年9月）が刊行された。

### (3) 紀要論文等

本節では紙幅の都合により、紀要等に論文・研究論考として採択されたものを主として、著者名、題目のみを掲げる。

2017年5月発行の『日本英語教育史研究』第32号(日本英語教育史学会)は、論文として竹中龍範「師範学校生徒による小学校英語科教育実習：明治末年における一事例」、惟任泰裕「戦前期の東京商科大学予科における英語入学試験問題：その特質と受験生に求められた英語学力」を採り、他に講演録として島岡丘「1人称で語る大塚キャンパスから筑波キャンパスへ：昭和7年からの歩み」を収める。

日本英学史学会の『英学史研究』第50号記念号(2017年10月)では、岩上はる子「『竹取物語』はいかに英訳されたか——F. V. ディキンズと南方熊楠の関わり」、赤石恵一「札幌農学校開識社の系譜：Massachusetts Agricultural Collegeにおける文学会規則との比較」の2本を論文として採択するが、記念号としてはやや寂しい。

同学会各支部の紀要では、東日本支部『東日本英学史研究』第17号(2018年3月)が、「特集 横浜居留地と英学」にて小玉敏子「横浜のミッション・スクール」の特別講演録、論文に河元由美子「横浜英国駐屯軍と日本人の接触」、三好彰「清水卯三郎『ゑんぎりし古止ば』に垣間見える海外とのビジネスの戸惑い」の2本を採り、一般論文に稲垣滋子「ジョセフ・ヒコの『開闢のあらまし』～『海外新聞』における『創世記』和訳～」を収載する。中国・四国支部では『英学史論叢』第20号(2017年5月)を発行、研究論考は竹中龍範「松山時代の漱石——英語教師夏目金之助の実像」、野村勝美「助動詞『た(だ)』の英・仏語訳をめぐって——『出家とその弟子』とその英仏訳本からの考察」の2本である。九州支部の記念論文集録についてはすでに触れた。

『東北学院英学史年報』第39号(2018年3月)は、赤井規晃・松田大江・下館和巳「翻刻 山川丙三郎より大賀壽吉の書簡(3)」の連載のほか、加藤芳子「ヒバード先生の思い出」、小野寺進「加藤孝先生の学統と東北学院——思い出を中心に」を掲載している。『へるん』No. 54(2017年6月)は、八雲会総会時の講演録、池野誠「小泉八雲研究・顕彰50年」に続き、「ヘルンの文学」、「ヘルンゆかりの人々・ゆかりの地」、「未刊行資料・埋もれた資料」のセクションに24本の記事を収める。

他に、平田論治「岡倉由三郎の言語思想に関する一考察——『日本語学一斑』(1890年)におけるW. D. ホイットニー言語論の検討」『筑波大学人間系教育学域 教育学系論集』第41巻第1号(2017年3月)、田邊祐司「日本英語音声教育史：P. A. Smithの*Notes on Practical Phonetics*について」『専修人文論集』第102号(2018年3月)等が関心を惹いた。

(4) その他

以上、「英学史の研究」各分野ならびに関連領域の動向を概観したが、平成の時代が幕を閉じようとしている今、明治はいつそう遠くなるものの、英学史・英語教育史研究のさらなる高まりを期待したい。

(元香川大学教授)